

## 異文化\*イーブン?

早川 和伸

タイに赴任してから三年が経過した。赴任当初は、日本（＝タイ語で「イーブン」）との様々な違いに困惑したのだが、それも次第に習慣になっていく。練乳を大量に入れた甘すぎるアイス・カフェ・ラテもそのひとつであるが、今では日本に帰国した際に喫茶店に行くとき、タイ並に甘くなるよう、リキッド・シユガーを大量に入れていく。また、日本でレストランに行っても、フォークとナイフでなく、フォークとスプーンで食事をしたくなる。このように、時間が経過するとともに、赴任当初に困惑した違いが習慣に変わっていく。そうやってくると、徐々に今度は日本に行った際に、タイとの違いに困惑し始める。

先される。正確にいうと、車は歩行者を無視して進入してくるため、物理的に立場の弱い歩行者が止まらざるを得ない。ここまで進入してあげればさすがに車も止まってくれるだろうと思っても、車はそこに歩行者がいらないかのように容赦なく突進してくるため、非常に危険である。実際、タイでは交通事故が非常に多く、多くの人が被害に合っている。したがって、歩行者としては、もう後続の車も含め、確実に大丈夫だと思えるまで待つ必要がある。道路を渡るにも時間がかかる。とくに、タイでは、左折に対して信号がないケースも多いため、車の流れはなかなか止まらず、非常に時間がかかる。一方、日本ではこれが逆になる。日本に帰ると、成田空港から銀座の「数寄屋橋交差点」宝くじ売り場前」行き的高速バスに乗ることが多い。高速道路を下り、東

京駅の八重洲口、有楽町の東京国際フォーラムを通過すると、数寄屋橋交差点までは、いくつもの交差点で左折を繰り返せば到着である。上述したように、タイでは信号待ちなしで左折できるため、ここまで来ると、もうほんのわずかな時間で到着すると思いがちである。しかし、日本ではここからが長い。日本は圧倒的に歩行者優先の社会である。信号が青になり、左折しようと思っても、歩行者が完全に横断歩道からいなくなるまで、車はじっと待っている。歩行者用の信号が赤になっても、小走り（をしているふり）した歩行者がまだ横断歩道内に残っているので、最前列の車もまだ左折できない。ようやく歩行者がいなくなる頃には、車両用の信号が黄色になり始める。結果、左折のために並んでいる車は、一回の青信号で、せいぜい前から三台程度しか左折できない。したがって、数か所の交差点で左折を繰り返すのに、多くの時間がかかる。右折用の信号がある分、右折のほうが早いのではないかと思うほどである。最後の交差点である数寄屋橋交差点で、歩行者がトロトロ歩いているのを見ると、怒りを覚えるほどである。

このように、外国での慣習、文化に慣れてくると、今まで当然と思っていた日本での慣習、文化に改めて気付かされるのが海外生活の醍醐味でもある。ただし、外国での慣習・文化に慣れ過ぎると、日本に戻った際の生活が不安になる。先ほどは「歩行者と車の関係」の違いについて紹介したが、「歩行者同士」にも違いがみられる。タイでは、歩道一杯に横に並んでトロトロ歩いても、またトロトロ歩いていかと思うと突然立ち止まり、衝突しそうになっても、そして前方から歩いてくる人に対して道を譲る気配が全くなくても、ケンカにならない。これは、小さいことは気にしないという「マイペンライ」の精神の賜物なのであるか。一方、この状況に徐々に慣れてきた私が、東京の駅構内で、猛スピードで歩く日本人たちの動きに対応できるはずがない。きつと、「何トロトロ歩いているんだ!」「不自然な動線を取るな!」などと心のなかで思われるに違いない。東京駅での京葉線への乗り換えが不安で仕方ない。

（はやかわ かずのぶ/JETROバンコク事務所）